「シンポジウム」日本文学 10

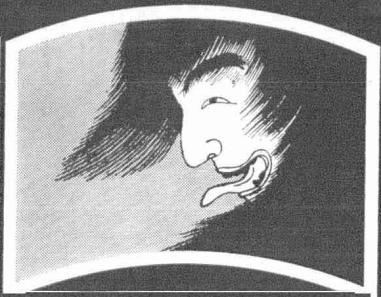
秋成

はるさめけふ幾日、しづかにておもしろ。
れいの筆研とう出たれど、
思ひめぐらすに、いふべき事もなし。
物がたりざまのまねびはうひ事也。
されどおのが世の山がつめきたるには、何をかかたり出ん。
むかし此頃の事ども人に欺かれしを、
我又いつはりとしらで人をあざむく。
よしやよし、寓ごとかたりつゞけて、
ふみとおしいたゞかする人もあればとて、
物いひつゞくれば、
猶春さめはふる〳〵。——『春さめ物語』序より

出席者
高田衛〈司会〉
森山重雄
種村季弘
中村博保
松田修　小松左京

学生社

「シンポジウム」日本文学 10



秋成

出席者
高田衛（司会）
森山重雄
種村季弘
中村博保
松田修　小松左京

学生社

出席者略歴

たかだ・まもる＝一九三〇年生まる。早稲田大学卒業。現在東京都立大学助教授。主要著書は『上田秋成年譜考説』（明善堂書店）『上田秋成研究序説』（寧楽書房）『餓鬼の思想』（新読書社）など。

もりやま・しげお＝一九一四年生まる。東京大学卒業。現在東京都立大学教授。主要著書は『近世文学の溯源』（桜楓社）『序説転換期の文学』（三一書房）など。

たねむら・すえひろ＝一九三三年生まる。東京大学卒業。現在自由文筆業。主要著書・訳書は『吸血鬼幻想』（薔薇十字社）『ナンセンス詩人の肖像』（竹内書店）『詐欺師の楽園』（学藝書林）G・R・ホッケ『文学におけるマニエリスム』（現代思潮社）など。

なかむら・ひろやす＝一九三二年生まる。早稲田大学卒業。現在静岡大学教授。主要著書は『雨月物語評釈』（共著・角川書店）〈日本古典文学全集〉『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』（共著・小学館）など。

まつだ・おさむ＝一九二七年生まる。京都大学卒業。現在国文学研究資料館教授。主要著書は『日本近世文学の成立』『日本芸能史論考』（以上法政大学出版局）『刺青・性・死――逆光の日本美――』（平凡社）『闇のユートピア』（新潮社）など。

こまつ・さきょう＝一九三一年生まる。京都大学卒業。作家。

司会者の諒解により検印を省略します　521

シンポジウム日本文学 10

秋　成

昭和52年 1月 20日　初刷印刷
昭和52年 1月 25日　初刷発行

司会者　高田　衛
発行者　鶴岡阪巳

発行所　株式会社　學生社

東京都千代田区九段南2-2-4(郵便番号102)
電話03(263)2611(代)振替・東京1-18870番
編集担当　堀　健二郎

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

〔シンポジウム〕日本文学——秋成・目次

第一章　和訳太郎の世界

――秋成文学の出発――

《報告》　森山重雄

はじめに……一五

Ⅰ　風俗小説としての偏奇性

肉体のエロスと観念のエロス・地女と遊女の差……一八

浮世草子における対精読者と対一般読者の意識……二一

Ⅱ　「騙り」の文学

見え透いた「騙り」・高村宮内の場合……三一

ニュース性と知的複合性……三五

モデルと虚構・柳屋里江の場合……三八

Ⅲ　ピカレスク・その人間関係の不毛性

アナーキーな修辞・「貧乏は……」の場合……四四

『世間猿』の親子関係・人間関係……四九

近世中期・その世相への対応の問題……五〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二章　『雨月物語』論
――孤児のミクロコスモス――

《報告》　種村季弘

はじめに……五六

Ⅰ　霊的な母の世界「異界」
幼児性と帰郷のモチーフ……六〇
「をさなき心」と「かだましき」と・『雨月』の女たち……六一
女人の地霊化――風景との結合……六五
「磯良」の命名の意識をめぐって……七〇
「吉備津の釜」の異端的世界……七二
『雨月』の女の二系列……七五
秋成の「女」認識と母の問題……七七
作家と母の関係・近代性？……八〇
集合的無意識――伝統――の「型」……八二
「類的」な感性の分裂としての「個」的な造型意志……八五

Ⅱ　文体・その機能性は何か
新しい小説意識・言語の様式化……八八
時間への逃亡……九二

秋成の第二の誕生としての、追憶と予感の言語宇宙……九四
Ⅲ 逆さ吊りの世界
破壊的要素と融和的要素・双面性のこと……九七
逆さ吊りの世界・異界と現実界のはざま……九八
Ⅳ 襲われるものとアイロニーについて
古代に対するアイロニカルな感情・「青頭巾」……一〇〇
和訳太郎の世界と『雨月』のつながり……一〇二
西行の像を考える……一〇四
情念の言語化・ロゴスとパトスの競合作用……一〇八
魔道・サタンと崇徳院の立場……一一〇

第三章　人間史幻譚
――『春雨物語』の世界――

《報告》　中村　博保

Ⅰ 『春雨』の様式喪失と寓言（そらごと）
エトスとしてのことば……一一〇
『春雨』における「正史」と「寓言（そらごと）」……一一三
近世における歴史意識と物語……一一三
棄てられる主題性・自然への還帰……一一七

Ⅱ　物語と歴史の位相
「ふみ」の解釈――状況的に……一三三
十八世紀の歴史研究段階……一三七
崇徳院と逆な設定の平城天皇……一四五
歴史と現実の中間の装置・上方の天皇感覚……一四八
善柔のたくましさと「われあやまりつ」……一五〇
『春雨』評価のむつかしさ……一五四
Ⅲ　「ゆめ」的時間
時間的逆行・歴史的現実の無化……一五七
「樊噲」の天狗道……一六一
旅行・遍歴と逃亡……一六五
Ⅳ　秋成の人鬼観
「鬼」の相貌について……一六八
秋成の人鬼観の成長と『春雨』の展開……一七二
大阪と秋成……一七六
「樊噲」の父殺し、兄殺しとジャイアント伝説……一七八
善・悪観念のはりつけの拒否……一八一

第四章　秋成・その心象と思想の背景

――「なぜ」の精神史的系譜――

《報告》　松　田　修

Ⅰ　根問いする作者
根問いする秋成自身の基本的性格……一九一
「なぜ」と「なぜなら」……一九三
Ⅱ　行動領域と精神領域
丹波国と上田家……二〇一
江戸文化と秋成の評価……二〇三
聖と俗の中間の「戯」……二〇六
Ⅲ　『胆大小心録』・晩年の一ポイント
『胆大小心録』の文体……二〇九
晩年の生活……二一三
Ⅳ　宣長との論争のこと
秋成の「幼児性」自覚の時期……二一六
秋成と宣長、その論証術の異質性……二二

第五章　『雨月』・『春雨』再論
――変身の論理――

《報告》　高田　衛

Ⅰ　変身について
「蛇性の婬」における変身……二二五
「夢応の鯉魚」の変身……二二九
異類性ということば、そのカテゴリー……二三一
本来的なものの発現としての変身……二三三
万物の霊長的人間観の超克――変身……二三七
「性」の論理と変身……二三九
Ⅱ　『雨月』のシンボリズムと恐怖願望
喰うことと喰われること――解放性と破壊性のゆれ動き……二四五
『雨月物語』の水と火……二四七
雨月的世界におけるタブーの導入……二五〇
口唇サディズムから精神のエロスへ……二五二
Ⅲ　怨念と偏愛の構図
作られた女・磯良……二五五
「吉備津の釜」――最終場面について……二五八

豊雄と兄嫁……二六〇
春夫の秋成観……二六二

Ⅳ『春雨』のなかの丈夫像

秋成の「丈夫」像の構造……二六六
デス・コミュニケーションの世界……二六八
タブーを超えるもの……二七〇
「死首のゑかほ」の方法性……二七一
「二世の縁」の異界否定……二七三
宗という女への疑問……二七六
心理描写を代行するもの……二七九
「二世の縁」における死の意味……二八三
丈夫と鬼・死の機織り……二八五

Ⅴ 無意志の物語性

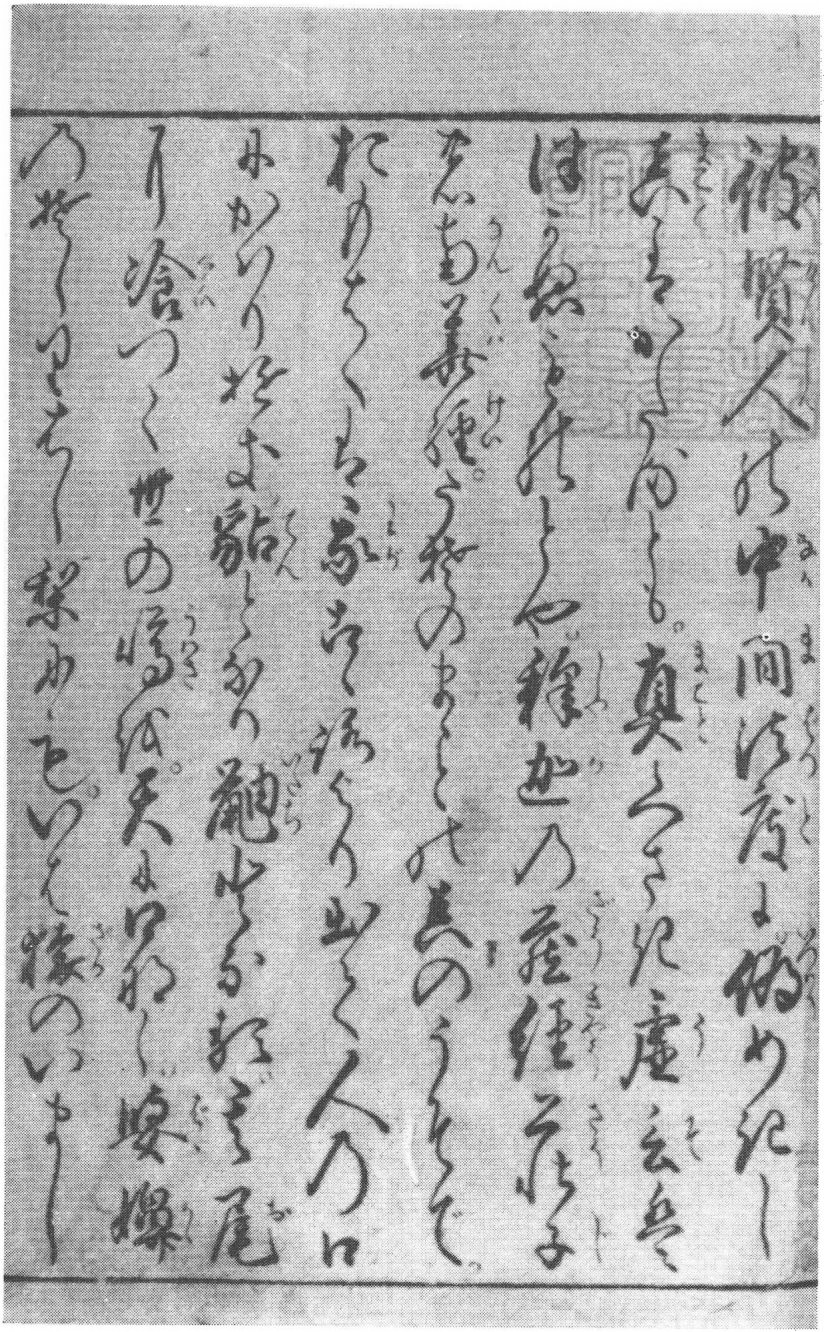
必然としての悲劇性・『春雨』世界……二八八
『雨月』と『春雨』のちがい……二九一
「捨石丸」の世界……二九三
「私」的風景……二九八
秋成の歌の小説性……三〇〇
故郷の歌・喪失したものへの想い……三〇一
秋成のワンダーランド……三〇二
時代社会の動揺、秋成の時代……三〇五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あとがき……三〇九
上田秋成略年譜……三一

秋

成



▼『醫道聽耳世間猿』序文

第一章　和訳太郎の世界
――秋成文学の出発――

《報告》　森山重雄

1　「のらもの」的発想

「のらもの」はアウトロウの一形態だが、普通のアウトロウとちがって社会からはみださない。体制・秩序のなかのアウトロウになっている。かれらは生を遊戯化して楽しんでいる。一切の体面をかなぐり捨てた世界。体面を捨てることで、生の秩序を内部から解体させてしまう。遊民の思想である。ここから「わやく」（ふざけ）が生じてくるし、諸道諸芸にかかわる遊民的発想が生まれる。「わやく」は和訳（漢に対して和）の意識とともに、すべての伝統的様式の破壊である。諸道諸芸は、人間の気質的あらわれとして、機能的に捉えられる。世間の意識とは、この気質的あらわれとしての集合関係である。またそれへの批判意識でもある。

2　荒唐世説（とりとめもなきよそごと、ナンセンス文学）

ナンセンス文学の根底には、一種の無の意識があるのかもしれない。価値的なものも無価値的にする。逆に無価値的なものを価値化してみせる。この変換式の間に笑が生ずる。西鶴の笑は、原型をつくるという意味で民話などと同じパターンをもった笑だったが、これが其磧・南鎮などを通過することによって、反転され逆転され、無限定にアナーキーになっていった。そしてそれが秩序と秩序の間の潤滑油となり、社会的規格や習慣の解体者となったのが荒唐世説である。

3　騙りの文学

価値の変換式は、一種の騙りである。たぶらかしの方法でもある。しかし、このたぶらかしは、作者がはじめから正体をあらわしているたぶらかしだから、読者を手玉にとるのではない。読者と共犯しながらたぶらかすのである。このたぶらかしの方法は、個我のプリミティヴな表出法だが、個我か不死身になって、解体的な様相をも厭わない一種の強さをもってきたことを示す。庶民意

識かそれだけ深化・徹底化して、二重底をもってきた。ここから騙りの意識が生ずる。

4　エロスと死

エロスを最低の次元にまでずりさげることで、常識的生活感情に反逆する。エロスが最低の次元に達するのは、一面に死の意識があるからである。死に近いものほどエロスと生に執着する。これは一種の生活本能の反逆である。妾（てかけ）とは遊女でもなく、地女でもないいかがわしい存在である。しかし、この時代は遊女ししんが昔の権威を失って、いかがわしい存在になっていたのかも知れない。小町零落譚やその他が末世的に頽廃して、かえって一種の庶民的強さとして甦えってきた感じである。

5　真性と擬似

諸芸には真性と擬似が伴う。しかし真性と擬似の間には差はない。擬似芸人も執心をもって廉直に、寝食を忘れて風流に苦しめば真性芸道人となる。真性のなかにも擬似が内在することがある。擬似も、真性も他者からみた印象であり、当人にとっては、それが一種の習性「くせ」となり、気質となる以外に道はない。町人にとって学問や芸道は、所詮擬似的なものだと秋成は、考えていたのかもしれない。これは、モデル問題にもあてはまる。モデルの人物と描かれた作品の間に、あまりにも落差がありすぎると考えるかもしれないか、この落差は本来秋成の真性と擬似との相対的認識からきている。

6　善悪の変貌・相対的認識

真性が擬似に変じ、擬似が真性に変ずるよう、善悪もまた交替し、相対化される。善人が悪人に変じ、悪人が善人に変ずる。人間は状況と環境によって変貌するという意識がある。ただし其積の気質物とちがって、性格を相互に交換するだけではなく、状況と性格の変身作用によるものであって、一種の感染作用である。この感染作用による人間の変貌はのちに「心納むれば誰も仏心也、放てば妖魔」（『樊噲』）という認識となる。そしてその中核には「直き心」「心直し」がある。『文反古』上にも「今の世に心なそめそしら紙のしろきぞおのがもとつ色なれ」とあり、また『藤簍冊子』に「ためずとも直き心は自ら竹とともにや空しかるべき」とあり、『胆大小心録』下に「一文不知の僧と、剛毅木訥の民とには、必ず無の見、成就の人あり」となって固定してゆく認識である。『世間猿』と『妾形気』は、この認識の前期的流動期である。したがって、「直き」よりも環境と状況からの感染の方が、重視されたのである。ここから庶民の偽似的な日常性を脱色してゆき、「直き」真性へと到達すれば、『雨月物語』が生れる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com